

帝国から国民国家へ

——オスマン帝国における共存形態の変容と崩壊——

岩 木 秀 樹

はじめに

中東イスラーム世界において未だに紛争が絶えない。これらの紛争は国際政治の焦点かつ不安定要素となっている。現在の状況を過去にも投影して、中東イスラーム世界は遙か昔から紛争が続いている地域であるかのように報じられている。「イスラーム対ユダヤ・キリストの怨念の歴史」との言説も喧伝されている。

しかしいつの時代でもこの地域が紛争一色であったわけではない。多様な宗教・民族によって構成される中東イスラーム世界において、一定の共存の歴史は存在した。紛争が噴出し始めたのは、西欧から様々な衝撃を受け始めた近代、もしくは第一次大戦後、さらに言うならば9・11事件以後なのである。

本稿では、最後のイスラーム帝国であったオスマン帝国を事例に、共存から対立の歴史を考察し、多宗教・多民族がどのように共存し、その共存形態がいかに変容していったのかを歴史的に分析する。現在の紛争を低減化し共存を目指すために、歴史から学ぶ必要がある。

具体的には、まず始めにオスマン帝国の共存形態の前提となるイスラームの寛容性の要因に触れ、その後オスマン帝国における様々の共存形態を考察する。近代に入り西欧からの衝撃により共存形態が変容し、対立へと向かっていく流れを説明し、最後に現在において、イスラームやオスマン帝国の志向様式が共存へのひとつのオルタナティブになりうる可能性に言及する。

1. イスラームの寛容性の要因

最後のイスラーム帝国であるオスマン帝国が比較的寛容な要因として、当然のことながらイスラームの寛容性が大きく影響している¹⁾。イスラームが寛容な要因として、次の三つが考えられよう。

第一に、イスラームが誕生した地域は、文明発祥の地で都市が発展し、また三大陸の結節点であり、さらに乾燥地域が多く農業には適していなかったため、商業が発達した。イスラームは、このような都市的、商業的文化の影響を強く受けた宗教であった。都市の中には様々な人間が存在しており、一定の共存システムがなければ都市は機能しないであろう。また商業において身近な人や自集団と交易をしても利益は上がり、異なる集団や他者との交易こそ、利益の拡大となる。つまり他者や他集団の存在が前提となっているのである。このことから他者への寛容性が醸成されたのである。

第二に、イスラームが多元的な預言者を認めることである。モーセもイエスも重要な預言者であり、ユダヤ教徒もキリスト教徒も啓典の民として、兄弟の宗教と位置づけられており、一定の共存を保っていた。

第三に、この地域は移動をする人々が多く、移動文化が常態となっている。遊牧・商業・留学・巡礼などが盛んで、移動の民が多い。移動をする人々にとって、排他的な線引き概念は邪魔なものであり、他者が自文化に入ってくることも拒まない代わりに、自分も移動先で安全が保障されることを望む。このようなことから寛容性が生まれてきた。

そもそもイスラームは平等・公正の意識が強く、このような意識のもと、大商業帝国を築いた。相手から搾取すると短期的には自己の利潤は上がるが、相手が経済的に疲弊してしまい商業交易は持続しない。むしろ平等・公正にやった方が儲かるとのメンタリティが息づいている。

オスマン帝国は、このようなイスラームの寛容性ととともに、多民族・多文化・多宗教の調和社會を築いたセルジューク朝の寛容性も継承した (Karpat 2010: 25, 36)。さらにオスマン帝国は、トルコ・イスラーム・イラン・メソポタミアの

文化的蓄積やセルジューク・ビザンツ・アナトリアの歴史的蓄積のたまものでもあった (Ünay 2010: 127)。ズインミー制の伝統からミット制²⁾も作り出され、各宗教集団に一定の自治を与えた。「右手にコーラン、左手に剣」との言葉は正確ではなく、現実には改宗か戦争か貢納かの三者の選択があった (Khadduri 1955: 80)。つまり啓典の民には、税金を納めれば一定の自治と自由が認められたのである。このミット制はヨーロッパによるナショナリズム概念の浸透まで機能し、数世紀にわたり非ムスリム・マイノリティにとって、平和的共存が一定程度機能したのである (Karpat 2010: 94)。

このような共存志向とは反対に、ジハード=戦争と捉えられ、好戦的なイスラーム・イメージが喧伝されてきた。しかしそれも不正確である。そもそもジハードとはアラビア語の動詞ジャハダに由来し、「努力する」という意味である (Khadduri 1955: 55)。弱い自己に打ち勝つ努力をすることを大ジハード、イスラーム共同体を破壊しに来る敵に対して武器を持って立ち上がることを小ジハードと言う。聖戦という意味の小ジハードも、基本的には防衛戦争の意味合いが強く、さらには武力を用いない平和的非暴力的方法も含まれている (Abu-Nimer 2003: 30, 62)。

2. オスマン帝国の共存形態

従来、オスマン帝国の歴史は世界的にもまたアラブ地域でさえも、否定的に捉えられていた³⁾。しかしながら、オスマンの共存の歴史から学ぶことは多く、多宗教が調和して共生する事例を提示しているのである (Karpat 2010: 57, 100, 104, Yılmaz 2008: 677)。

最後にして最大のイスラーム帝国であるオスマン帝国は、イスラームの寛容性を一定程度体現した帝国であった。日本史で言えば、鎌倉時代から大正時代まで続き、アジア・ヨーロッパ・アフリカにまたがる巨大帝国であった (林 1997: 1)。このような広大な帝国を長期間維持するには、一定の共存形態が機能し、特定の宗教・民族などに偏らない政策が必要であろう。もしそうでなければ、不満が蓄積し、反乱が増大し、早々に帝国崩壊となったであろう。こ

(226)

では、オスマン帝国の共存形態を考察し、帝国維持の要因を見ていく。

まず、オスマン帝国の版図の中心であった東地中海地域は、土地ではなく人を単位とする属人法の伝統が強く、脱領域的支配の傾向があった。領土意識や線引き概念がそれほど強くなかったことから、排他的志向様式が強まることはあまりなかった。

オスマン帝国にはデヴシルメ制と言われる制度が存在した⁴⁾。キリスト教徒の子弟を強制徴集し、スルタンの奴隷身分に編入してムスリム化したうえで、官僚や軍人として登用した。なかには高級官僚・高級軍人・大宰相にまで登りつめる者もいた。この制度による奴隷身分出身者が中央の支配組織の主たる担い手となり、「貴族なき社会」というイメージを作りだした(鈴木 1997:167)。事実、16世紀にオスマン帝国に赴いたハプスブルグ大使オギュエル・ド・ビュズベクは以下のような言葉を残している。「スルタンの下で最高の地位を占める者も、非常にしばしば、羊飼いや牧人の子であったりする。彼らは優れた能力というものが生まれによって与えられたり、相続によって伝えられるなどとは考えず、天与の資質とよい訓練とたえざる努力と熱意の賜物だとみなしているのである。トルコ人たちの間では、高い官職も行政上の職位も、能力と業績への報酬なのである。これが、なぜトルコ人たちがなすことすべてに成功し、支配民族となり、日々に彼らの支配領域を拡大しているかの理由である(鈴木 1992:204)。」

ここにはトルコ人との表記があるが、これもヨーロッパによるステレオタイプであり、オスマン帝国はトルコ人が支配していたトルコ帝国でもオスマン＝トルコ帝国でもなかった(Yılmaz 2008:678)。当時のオスマン帝国の自称としては、「崇高なる国家」もしくは「崇高なるオスマン国家」であった。国家の名称に特定の民族名などの固有名詞が入っていないということは、コスモポリタン性を象徴するものとも言えよう。

またそもそもスルタンですら混血が進み、トルコ人ではなかった。三代目のスルタンは、母親がキリスト教徒ギリシア人であり、四代目は祖母も母もそうであった。15・16世紀の頃の大宰相は、もともとキリスト教徒だったギリシア

人やセルビア人が多かった。それにもかかわらず、トルコ帝国と呼んだヨーロッパ人に、オスマン帝国にキリスト教徒が関わったことを認めたくない心性が働いたのであろう（新井 2009: 25）。

1492年にいわゆるレコンキスタが完成し、イベリア半島からムスリムを排除することに成功した。同時にムスリムだけでなくユダヤ教徒も迫害されるので、オスマン帝国に逃げてきた（Karpat 2010: 133）。ユダヤ教徒にとり、オスマン帝国下で生きる方がよりましたであったからであろう。1492年はレコンキスタが完成し、キリスト教共同体をヨーロッパにおいて作りだした年であり、またコロンブスがアメリカ大陸に到達した年でもあった。この年は、ユダヤ教徒やイスラーム教徒排除によるキリスト教共同体形成といった内なる植民地主義と、新大陸への進出といった外なる植民地主義を象徴するものである。

オスマン帝国のスルタンはイスラームのカリフであり、中央アジア起源の汗（ハン）であり、さらにはローマ帝国の後継者としての皇帝でもあった（Ortaylı 2009: 183）。東ローマ帝国を崩壊させて、コンスタンティノープルを占領したメフメト二世は、自らの宗教寄進文書で、オスマン帝国がローマの後に立ちあがったものであると説き、自らをアレキサンダー大王の杖を受け継ぐものと称している。異教のアレキサンダー大王やキリスト教徒であったローマの皇帝たちの玉座を受け継ぎ、イスラームの時代を体現したのである（林 2008: 96-97）。このようなことからイスラームとキリスト教などを二律背反的に捉えることを戒めなければならないであろう。トルコにおいても最近、オスマン帝国はイスラーム化したビザンツ⁵⁾であるとの主張も出てきている（野中 2010: 83）。オスマン帝国は単なるイスラームやアジアの帝国ではなく、バルカンやローマの帝国でもあった。オルタイルによれば、パックス・オットマニカは、パックス・ローマーナの最後のモデルであり、オスマン帝国はムスリムによる第三のローマであった（Ortaylı 2010: 11, 49）。

このようにオスマン帝国はローマの継承国家でもあった。それは単にオスマン帝国がビザンツを滅ぼし、その領土を継承したということのみには留まらない。オスマン帝国は自らがローマの正統な後継者であると自覚し、ギリシア語

(228)

を話すキリスト教徒の古いローマ帝国に代わり、トルコ語を話すムスリムの新たなローマ帝国として、地中海に君臨した。しかもビザンツとアラブ・イスラームという古代ローマの二つの後継者を共に継承したオスマン帝国は、他の継承国に比べて特別の地位を占めたのである（藤波 2013:56,72）。

最大版図であった16世紀のスレイマン一世時には、中欧からインド洋に至る世界強国の地位が与えられ、最後の地中海帝国、さらには世界帝国となった（Inalcik 1994: 3, Uyar 2009: 281, Güvenç 1994:169）。ここにおいてオスマン帝国は、帝国とイスラームを兼ね備えた世界で最もコスモポリタンな国家として、オスマンのユニバーサリズムを体現したのである（Onar 2009: 230, Hanioglu 2008: 24）。

オスマン帝国の支配は巧妙であり、中期までは一定程度機能していた。相手に対して状況により、同盟・貢納金を払う属国・直接支配等をうまく使い分けていた。また当該地域の旧来の支配者をオスマン支配層に取り立てていた（林 2008:58-66）。支配した地域の実状に合わせ、しばらくは旧来の勢力に支配を任せ、徐々にオスマンの政策を浸透させ、中央から役人等を配置した。

このようなオスマン帝国の多様かつ柔軟な構造を鈴木は、「柔らかな専制」と呼び、そこでは流動性が高く不満が蓄積しない社会が作られ、次のような複合的ピラミッド構造が機能した（鈴木 1993:197-198）。第一は、ムスリムは、優越的集団をなしていたが、優越的集団としてのムスリムと従属的集団としての非ムスリムという二つの集団の区分が直ちに身分秩序における支配者身分と被支配者身分との区分に重なるわけではなかった。第二は、エスニックな所属、宗教的な帰属が、支配者と被支配者との分画と、必ずしも全面的に結びついてはいない。第三は、各エスニック集団内に、それぞれある程度の社会的流動性が存在していた。第四は、優越的集団と従属的集団との間には常に移動の可能性が開かれており、非ムスリムは改宗することにより、理論上は完全なムスリムになることができた。

今までオスマン帝国の共存形態を見ていたが、限界や否定的側面も当然存在する。そもそもイスラームはある特定の場合において暴力の行使は正当化され、いわば絶対平和主義ではない（Abu-Nimer 2003: 27）。イスラームは他宗教に対し

て、一定の自治と自由を認めるが、イスラームと他宗教は完全に平等だったわけではない。例えばキリスト教の教会の修繕は認められるが、新たに建てることは禁じられ、十字架や祈りはこれ見よがしに見せつけてはならず、鐘も大きな音は出してはいけなかった (Khadduri 1955: 195)。オスマン帝国においても、ムスリムは支配者意識と帝国意識を持っていた。近代において列強によってやられる側としてのオスマン帝国が強調される傾向があるが、別の側面では帝国主義的支配を実施する主体でもあったのである (佐々木 2014:13, 20)。

3. 西欧からの衝撃と共存形態の変容

今まで共存の歴史を見てきたが、ここでは共存から紛争に至る歴史的背景を考察する。

オスマン帝国は16世紀から17世紀にかけて再編の時期を迎える。スルタンが軍事遠征や政治の実権から次第に遠ざかるようになり、スルタンから大宰相へと政治の中心が移行した。このことは官僚システムが整備され、スルタンそのものはそれほど重要でなくなったことも意味していた。

またイエニチェリ軍団が世襲化するようになり、無頼集団と化すこともあった。17世紀にはデビシルメ制はほとんど行われなくなり、今までの実力登用主義が形骸化し、世襲化や特権層の形成が進んでいった。世襲化が進むと当然、優秀な人材が登用できなくなり、帝国は人材の面でも斜陽し始める。

1581年にオスマン財政は初めて赤字となった。その原因は、戦費を中心とした支出の増大と、メキシコ・ペルー産銀の流入等によりインフレが進行し物価が上昇したことによる。その後、国庫収入を増やすために、徴税請負制が導入された (林 2008:209-211)。次第に徴税請負人に終身の徴税権を与えるようになり、土地が私有され、在地有力者が誕生した。その結果、中央政府への税収が減少し、中央集権体制が揺らいでいった。

今までオスマン帝国内部の変容を見てきたが、次に外部からの影響を考察する。

近代に入り、オスマン帝国は次第に西欧から様々な衝撃を受けるようになって

(230)

ていく。まず西欧において、大西洋航路が開発され、オスマンの海であった東地中海はそれほど使用されなくなり、貿易量や税収入も減少した。また西欧において産業革命が起こり、工業化により軍事力も増強された。ここに来て、工業化・軍事化の側面で、オスマン帝国は西欧より後れをとるようになってきた。

さらに西欧において近代資本主義が勃興し、世界に浸透し始めた。このような近代資本主義にオスマン帝国は不適合をきたした。財とサービスの生産・交換・消費が市場を通じてなされる市場経済という意味においてのイスラーム世界は高度な資本主義社会であった。しかし産業革命を経た機械制工業のもとの近代資本主義には成功しなかった。なぜなら、イスラーム世界は高度に分業化された市場社会であったため、多くの投資や雇用の機会が開かれていた。したがって親の後を継ぐなど職業的世襲化をする必要もなく、家系の職業のみならず個人一代の職業の流動性も高かった。それゆえ莫大な信用を作りだし資本の蓄積を可能にさせる制度は作られなかった。また政治とは距離を取る自由主義的なイスラーム経済は、政治と軍事を味方につけた西欧の重商主義経済システムに競合できず、近代資本主義社会から後れをとったのである（加藤 2003:108-128）。

17世紀末に第二次ウィーン包囲に失敗したオスマン帝国は、1699年にカルロヴィッツ条約を結んだ。オスマン-ハプスブルク関係が転換期を迎え、オスマン帝国は攻撃から防衛主体へと後退し、対外関係の転機を迎えた（Ahmad 2003:21）。露土戦争後の1878年のベルリン条約では、バルカン諸国が独立を果たし、ミット制は崩壊を迎えた（Karpát 2010:47）。

西欧からの最大の衝撃はナショナリズムであった。このナショナリズムや国民国家に対してもオスマン帝国は不適合をきたした。西欧の衝撃により、ナショナリズムという西欧で生み出された政治単位を、文化的・歴史的・政治的にも伝統が異なるこの地域に受容することは困難であった。言語・民族・宗教において、モザイク状況で複雑な構造を持った中東イスラーム世界では、ナショナリズムにより内部分裂を引き起こし、紛争発生の原因となった。オルタイルに

よれば、ナショナリズムによって崩壊した最後のローマ帝国がオスマン帝国だったのである (Ortaylı 2010: 21)。

多宗教共存のオスマン帝国に、西欧よりナショナリズムが流入し、欧米列強の思惑も加わって帝国が民族によって分断された。中東イスラーム世界は宗教的・民族的に多様であり、一民族一国家を理想とする国民国家建設は困難を極めた。単一の宗教・民族で国家を構成することが不可能なこの地域に均質な国民国家を形成するという幻想は、今日まで不幸の種を蒔き続けている (林 2008:367)。

オスマン帝国はナショナリズムの衝撃に対して、19世紀以降、オスマン主義を掲げて対応した。1839年からのタンズィマート以後、スルタンやオスマン帝国に対する忠誠心を育成し、多宗教・多民族からなる帝国を維持するイデオロギーであるオスマン主義の育成がはかられた。オスマン主義とは、オスマン帝国全住民の平等を基礎に、彼らをオスマン国民として一体化させようとするイデオロギーであり、タンズィマート以降、宗教・民族の差に関わらず、全て住民を平等に扱うことを定めたものである (新井 2002:228)。オスマン主義は、最終的に帝国の維持に失敗した脆弱なイデオロギーとされているが、可能なかぎりの多様性を容認することによって、分離主義を抑制し、国家の統合を維持するイデオロギーでもあった (佐原 2003:139)。また民族的なものを政治化させない装置でもあり、一定のコスモポリタンの雰囲気も都市においては見られた。

現在のバルカン諸国やトルコにおいても、当該地域の民族主義史観等によりオスマン支配が抑圧的であったとされる言説が存在する。しかしオスマン共存体制やオスマン主義が一定の有効性を持っていたことも事実である。オスマン主義は、1910年代初めくらいまではイデオロギーとして、分離主義を抑制する機能もあったのである⁶⁾。

4. 20世紀の対立要因

20世紀に入り、さらにナショナリズムを持ち込み、中東分割と支配を謀ったのが、第一次大戦当時のイギリスやフランスであった。それは、シオニズム対

(232)

アラブ・ナショナリズムの衝突、トルコ・ナショナリズム対アルメニア、アラブ、クルド・ナショナリズムの対立である。これらの衝突は、いずれもヨーロッパ諸国がナショナリズムを煽って混乱を引き起こし、分割を画策した時期に生じた（内藤 2008:73）。

国民国家建設の困難さは、イギリスやフランスによる三枚舌外交によってさらに増幅され、人為的な国境がもたらされた。三枚舌外交とは、第一次大戦を有利に進めるためにアラブとシオニストの双方から支援を取り付けようと、1915年7月から16年3月までのフセイン・マクマホン書簡によりアラブにはアラブ王国の独立を認め、1917年11月のバルフォア宣言によりシオニストには民族的郷土を作ることに同意し、その裏では1916年5月のサイクス・ピコ協定⁷⁾によりイギリスとフランス・ロシアが東アラブを分断して勢力圏に置くことを狙ったものである（Şahin 2011: 39-41）。

このようにして作られた歪んだ人為的な国民国家を統治することは非常に困難であり、国民としてのアイデンティティも形成しにくい状況では、必然的に上からの強圧的な中央集権体制をとることが多くなっていく。そうでなければ遠心力が働き、すぐに分裂する可能性があるのである。中東において権威主義体制が多い理由の一つはここにある。

イスラエル・パレスチナ問題も、中東における様々な問題の背景となっている。ユダヤ問題はそもそも中東には存在せず、ユダヤ問題とは実はヨーロッパ問題なのである。しかし中東地域にイスラエルが建国され、いわばヨーロッパにおけるユダヤ問題を中東に転嫁・移植したのである⁸⁾。現在に至るもイスラエルは国際社会では認められていない土地を占領し、多くのイスラーム教徒、アラブ人等を抑圧している。中東イスラームの人々は様々な局面でこの問題に対する不満を噴出させている。

石油等の地下資源の存在もいくつかの問題の背景となっている。豊富な資源により働かなくてもよい金利国家になり、莫大な富は一部に偏在し格差が増大する。また石油を目当てに外部勢力も介入を繰り返し、場合によっては紛争となる。石油の存在が豊かな社会を作るのではなく、格差と混乱を生む皮肉な結

果となっている。

5. 共存へのオルタナティブ

中東イスラーム世界では、西欧の衝撃により、ナショナリズムや近代資本主義を受容せざるを得なかった。しかしこの地域にはどちらに対してもかなりの不適合をもたらし、紛争の原因ともなっている。

だが最近になってそれらを超克するために、旧来の思考様式を現代的にアレンジする動きも見られている。ナショナリズムに対してはイスラーム主義や新オスマン主義、近代資本主義に対してはイスラーム経済がオルタナティブを提起している。

トルコとクルドの争いに対して、イスラームを掲げ、同じイスラームの民として民族紛争を止揚する方法もある。ナショナリズムを突出させないための宗教の機能は重要であろう。

また弱肉強食の現在の新自由主義に対して、弱者に優しい実体経済に裏付けられたイスラーム銀行の試みがある。利子や賭事は金持ちに有利なのでそれらを廃し、公正・公平をモットーとするイスラーム経済は、自由主義や社会主義とは異なる第三の道を志向する可能性がある。また相手から搾取すると持続的な商業関係は作れず、むしろ公正公平にやった方が儲かるとのメンタリティを持ったイスラーム教徒だからこそ、オスマン帝国のような大商業帝国が作れたのである。

新オスマン主義もナショナリズムや国民国家を超えようとする動きのひとつである。1980年代後半から1990年代前半にかけてトルコのオザル大統領は、民族紛争が続くトルコ国内やバルカンさらに旧オスマン領に新オスマン主義のモデルを適用しようとした。

オスマン帝国時代と同様に民族をできるだけ意識させずに、特定の民族や宗教が優越的地位を占めるのではない共存システムを目指した。職業・階級・支配者などの社会的流動性が高く、異質文化国家間関係が主たる体系であった国際秩序観を有していたオスマン帝国は、現在の新自由主義により固定化しつつ

(234)

ある社会関係や国民国家に対してオルタナティブを投げかけており、新オスマン主義もこれらを視野に入れているのである。

新オスマン主義は、オスマン帝国の末裔としてのトルコと、周辺諸国に対する経済的先進度という2点で、トルコが旧オスマン支配地域と新興の中央アジアのトルコ系諸国に対して外交と経済分野でリーダーシップを発揮することができ、またそうすることで国際政治におけるプレゼンスを高めるべきだという考えなのである(澤江 2005:110-117)。それは、新たなトルコ支配であるとの非難もあるが、分離主義的ナショナリズムの台頭を抑制しながら、新しい政治アイデンティティを志向し、西洋と伝統的価値を調和させる多文化・多宗教・多民族共存モデルでもある(Çolak 2006:592, Davutoğlu: 2009:85)。このように現在にも生きているオスマンの共存システムは、西欧国民国家のアンチテーゼになりうる可能性がある(Hinnebusch 2003: 15)。

おわりに

戦禍が止まない現在、過去の共存の歴史を学び、戦争の要因を知り、その原因を除去する作業は重要であろう。

オスマン帝国はイスラームにおける寛容性を体現し、宗教や民族にこだわらない幅広い人材登用システム、ローマを継承した世界帝国、支配地域に適合したシステムの採用、流動性の高い社会等により、一定の共存を保ったのである。600年以上も広大な地域を支配するには、このような共存システムが機能しなければ難しいであろう。

しかし、次第にオスマン帝国の内部は変容し始め、世襲化・特権化等が見られるようになり、インフレや在地有力者の台頭により中央集権体制が揺らいでいった。

変容の外的要因は、西欧からの衝撃だった。近代資本主義に適合できず、宗教・民族ともに多様であるが故に、均質な近代国民国家形成は難しかった。特に第一次大戦における三枚舌外交により不自然な国境線が引かれ、西欧におけるユダヤ問題を転嫁されたことは、中東イスラーム世界をいっそう不安定なも

のにしていった。

だが現在、国民国家や近代資本主義が様々な局面で限界を露呈しており、イスラームの寛容性やオスマン帝国の共存システムが再び注目されている。争いの原因を取り除けば、人々は仲良く暮らしていけるのである。そのことを歴史は証明している。

注

- 1) イスラームの寛容性及びオスマン帝国の共存形態については(岩木 2013)、を参照。
- 2) ミットトとは、オスマン帝国において公認された宗教共同体である。オスマン政府は属地支配、とくに自領内のルーメリア(バルカン)やアルメニアなどに居住する非トルコ系非ムスリム系住民の構成する共同体に対し、保護と支配とを兼ねる特殊な宗教共同体を設けた(三橋 1982: 358)。ただし最近の研究では、ミットト制を裏付ける史料は存在せず、ミットト制という捉え方は近代に入って一般的になったものであり、ズィンミー制の名残とも言えよう。ズィンミーとは庇護民の意味で、ムスリムの支配に服従・協力シジズヤ(人頭税)とハラージュ(地租)を納める義務を負った代わりに、生命・財産の安全と宗教の自由が保障された制度である(高野 2002: 529)。
- 3) 現在のアラブやバルカン諸国さらにはトルコにおいてさえ、現体制を正当化するために、前体制であったオスマン帝国への評価は低い。特にナショナリストやマルクス主義者、さらには世俗的近代主義者やイスラーム主義者もオスマン帝国を否定的に見ている者が多い(Brown 1996: 13, 265, 301)。
- 4) デヴシルメ制には様々な規則があり、強制徴集といっても、一人っ子やユダヤ教徒からは徴集しなかった(Ortaylı 2010: 136)。このデヴシルメ制は、オスマン帝国システムの中に実力登用主義をもたらし、さらには征服したキリスト教共同体を統合する機能も果たした(Ahmad 2003:4-5)。
- 5) ビザンツとは、5世紀後半以降のローマ帝国を、その首都の旧名ビザンティウムにちなんで19世紀以降の西欧の歴史家が呼んだ俗称である。330年に首都をコンスタンティノープルに遷した後のローマ帝国を、もうローマ帝国とは呼びたくないとして、ビザンツ帝国なる名称をひねり出したのである(後藤 2001: 28-29, Ortaylı 2010: 140)。しかし歴史的事実として、オスマン帝国もローマ帝国の継承者であった事実は消せないのである。また東西の境界とは、カトリックのゴシック調教会が姿を消すところで、そこで、西方は終わるのである。オーソドックス教会とモスクが現れ始めるところが東方の始まりであり、それは本来クロアチア

(236)

で線引きがされるのである（野中 2010：157）。

- 6) なお、オスマン主義及びトルコ・ナショナリズムについては（岩木 2014）、を参照。
- 7) サイクス・ピコ協定によって、現在のいわゆる「中東諸国体制」が作られたのであるが、このサイクス・ピコ協定からの脱却を目指す動きが経済と「テロ」の両側面で現在見られている。経済の側面では、イラクのクルド地域とトルコが石油と天然ガスの相互利益により旧来の国境線を超えて新たな経済圏の再編が進んでいる。「テロ」の側面では、シリアやイラクで勢力を広げている「イスラーム国」はサイクス・ピコ協定の打倒を掲げ、カリフ制の復活を目指しており、既存の国家の枠を超越した運動を行っている（オッタウェイ 2014、高岡 2014）。
- 8) そもそも、オスマン帝国下のユダヤ人の中には、シオニズムを「最愛の」オスマン祖国への裏切りと捉える人々も多かった（Campos 2005:461）。

引用文献

トルコ語

- Ahmet Davutoğlu, *Stratejik Derinlik: Türkiye' nin Uluslararası Konumu*, Küre Yayınları, 2009.
- Bozkurt Güvenç, *Türk Kimliği Kültür Tarihinin Kaynakları*, T. C. Kültür Bakanlığı Milli Kütüphane Basımevi, 1994.
- İlber Ortaylı, *Osmanlı'yı Yeniden Keşfetmek*, Timaş Yayınları, 2009.
- *Osmanlı Barışı*, Timaş Yayınları, 2010.
- Türel Yılmaz Şahin, *Uluslararası Politikada Orta Doğu*, Barış Kitap, 2011.
- Sadık Ünay, "Uluslararası Sistem ve İç Dönüşüm: Osmanlıdan Cumhuriyete Türkiye' nin Kalkınma Sorunsalı," *Akademik Araştırmalar Dergisi*, Sayı 45, 2010.

英語

- Mohammed Abu-Nimer, *Nonviolence and Peace Building in Islam: Theory and Practice*, University Press of Florida, 2003.
- Feroz Ahmad, *Turkey: The Quest for Identity*, One world Publications, 2003.
- L. Carl Brown ed., *Imperial Legacy: The Ottoman Imprint on the Balkans and the Middle East*, Columbia University Press, 1996.
- Michelle U. Campos, "Between "Beloved Ottoman" and "The Land of Israel": The Struggle Over Ottomanism and Zionism among Palestine's Sepharadi Jews, 1908-13", *International Journal of Middle East Studies*, Vol. 37, 2005.

- Yılmaz Çolak, "Ottomanism vs. Kemalism: Collective Memory and Cultural Pluralism in 1990s Turkey," *Middle Eastern Studies*, Vol. 42, No. 4, 2006.
- M. Şükrü Hanioğlu, *A Brief History of the Late Ottoman Empire*, Princeton University Press, 2008.
- Raymond Hinnebusch, *The International Politics of Middle East*, Manchester University Press, 2003.
- Halil Inalcik, *The Ottoman Empire: The Classical Age 1300-1600*, Phoenix, 1994.
- Kemal Karpat and Yetkin Yıldırım eds., *The Ottoman Mosaic: Exploring Models for Peace by Re-Exploring the Past*, Cune Press, 2010.
- Majid Khadduri, *War and Peace in the Law of Islam*, The Johns Hopkins University Press, 1955.
- Nora Fisher Onar, "Echoes of a Universalism Lost: Rival Representations of the Ottomans in Today's Turkey," *Middle Eastern Studies*, Vol. 44, No. 2, 2009.
- Mesut Uyar and Edward J. Erickson, *A Military History of the Ottomans from Osman to Atatürk*, ABC-CLIO, 2009.
- Şuhnaz Yılmaz and İpek K. Yosmaoglu, "Fighting the Spectres of the Past: Dilemmas of Ottoman Legacy in the Balkans and the Middle East," *Middle Eastern Studies*, Vol. 44, No. 5, 2008.

日本語

- 新井政美「オスマン主義」大塚和夫他編集『岩波イスラーム辞典』岩波書店、2002年。
——『オスマン帝国はなぜ崩壊したのか』青土社、2009年。
- 岩木秀樹「オスマン帝国における共存形態と国際関係」『ソシオロジカ』37号1/2号、創
価大学社会学会、2013年。
——「オスマン主義からトルコ・ナショナリズムへ オスマン帝国のバルカン戦争期
におけるイデオロギーの変容」『国際アジア共同体学会ジャーナル』第3/4号、国
際アジア共同体学会、2014年。
- マリナ・オッタウエイ、デビッド・オッタウエイ「変化する中東の経済地図－旧秩序の
解体と新経路圏の誕生」『フォーリン・アフェアーズ・レポート』No.6、フォー
リン・アフェアーズ・ジャパン、2014年。
- 加藤博「経済学とイスラーム地域研究」佐藤次高編『イスラーム地域研究の可能性』東
京大学出版会、2003年。
- 後藤明『ビジュアル版 イスラーム歴史物語』講談社、2001年。
- 佐々木伸『オスマン憲政への道』東京大学出版会、2014年。
- 佐原徹哉『近代バルカン都市社会史 多元主義空間における宗教とエスニシティ』刀水
書房、2003年。
- 澤江史子『現代トルコの民主政治とイスラーム』ナカニシヤ出版、2005年。

(238)

鈴木董『オスマン帝国 イスラム世界の「柔らかい専制」』講談社、1992年。

——『イスラムの家からバベルの塔へ オスマン帝国における諸民族の統合と共存』リプロボート、1993年。

——『オスマン帝国とイスラム世界』東京大学出版会、1997年。

高岡豊『『イラクとシャームのイスラーム国』は何に挑戦しているのか』『世界』8月号、岩波書店、2014年。

高野太輔「ズインミー」大塚和夫他編集『岩波イスラーム辞典』岩波書店、2002年。

内藤正典「トルコ共和国の根幹 絶対不可侵と世俗主義の現在」『別冊 環 14 トルコとは何か』藤原書店、2008年。

野中恵子『ビザンツ、オスマン、そしてトルコへ 歴史をつなぐ社会と民族』彩流社、2010年。

林佳世子『オスマン帝国の時代』山川出版社、1997年。

——『オスマン帝国500年の平和』講談社、2008年。

藤波伸嘉「オスマンとローマ—近代バルカン史学再考—」『史学雑誌』122編6号、史学会、2013年。

三橋富治男「ミレット制」『イスラム事典』平凡社、1982年。

From an Empire to a Nation State: Changes in and Collapse of Coexistent Systems in the Ottoman Empire

Hideki Iwaki

This paper examines the history of conflicts and the coexistence of different religions and ethnicities in the Ottoman Empire, which was the last Muslim empire. The main focus is on the coexistent systems and the changes in these systems in a multi-religious and multi-ethnic empire. One factor that strongly supported the coexisting systems in the Ottoman Empire was the idea of tolerance rooted in Islam. As Western influences in the Modern Period began to increase, there were changes brought about in these systems. In order to find hints to reduce current conflicts, it is imperative to study the history of the Ottoman Empire.